

第1回 初年次教育学会教育実践賞 審査結果

このたびは、第1回初年次教育学会教育実践賞に多くのご応募をいただき、誠にありがとうございました。また、大部にわたる申請資料を審査するのに時間を要し、審査結果の発表が大幅に遅れましたことを深くお詫び申し上げます。審査結果を以下のように発表いたします。

最優秀賞

申請者（○は代表者）	取組名称
菊地滋夫氏（明星大学） ○鈴木浩子氏（同） 御厨まり子（同）	教職学協働で進化する学部学科横断型初年次教育科目 「自立と体験」

優秀賞

申請者（○は代表者）	取組名称
初見康行氏（いわき明星大学）	早期退学防止を目的とした初年次教育の実践 — 4年間の成果と課題—
上田勇仁氏（徳島大学）	全学的な初年次教育科目 SIH 道場の取組 — 3年間における取組の評価と課題—
○宮本淳氏（愛知医科大学） 仙石昌也氏（同） 山森孝彦氏（同） 久留友紀子氏（同） 橋本貴宏氏（同）	クラウドを利用した初年次学生レポート作成過程の分析と その教育効果

*申請者のご所属は、申請当時のものです。

【講 評】

今回、14 大学 14 取組の応募があった。独創性、適切性、有効性、汎用性、有用性の5つの観点から厳正に審査した結果、最優秀賞1件、優秀賞3件が選定された。また、優秀賞に選定されなかったものの、石川県立看護大学、愛媛大学、お茶の水女子大学、花園大学、立命館大学の各取組については、優秀賞に次ぐものと評価された。

最優秀賞に選定された明星大学の取組は、全1年生が受講する「自立と体験」において、学部学科横断型のクラス編成を通して、多様な他者と関わりながら学び、自己理解を深めるとともに、卒業後の将来を見通した大学4年間の学びの計画を立てるものである。また同科目では、学習習慣、主体的な学び方、専門分野の学習に必要な基礎的スキルも同時に育成している。同取組は、9年間の取組の継続性と改善、全学的な組織的取組と浸透度、などの点において、類似の取組を行う大学にとって有益なモデルとなりうる。また、同取組を通して、進級率、離籍率、卒業率、1年在籍率などが継続的に改善していることも高く評価できる。今後の課題として、成果検証のための複合的な評価方法の検討があげられているが、これについては、eポートフォリオの導入も検討されており、さらなる改善が期待される。

優秀賞に選定された3取組には、いずれも教員同士の綿密な連携と周到なプログラム設計がみられる。また、アクティブ・ラーニングやICTの効果的活用によって、学生の基礎的な学習スキルの育成に成果をあげている。

申請取組全体をみると、個人の取組にとどまらず、全学的あるいは組織的な取組が多くみられた。今後の初年次教育のありかたを考えると、組織的な取組がますます重要になる。申請取組のさらなる継続・改善を期待するとともに、本学会での実践報告を通して、各取組の成果が学会の共有財産になることが望まれる。

以上

2019年7月7日
初年次教育学会
教育実践賞審査委員会